平成29年度第１回　岩手県総合教育会議　会議録

１　開催日時
　開会　平成29年５月15日（月）午後４時
　閉会　平成29年５月15日（月）午後５時

２　開催場所
　県庁３階　第一応接室

３　出席者
　達　増　拓　也　知事
　千　葉　茂　樹　副知事（※オブザーバー）
　高　橋　嘉　行　教育長
　八重樫　　勝　　教育委員
　小　平　忠　孝　教育委員
　芳　沢　茎　子　教育委員
　藤　井　克　己　教育委員
　畠　山　将　樹　教育委員

４　説明等のため出席した職員
　今野教育次長兼教育企画室長、岩井教育次長、鈴木教育企画室企画課長、永井教職員課総括課長、
　小久保学校調整課総括課長、中島学校教育課総括課長、荒木田保健体育課総括課長、
　佐藤生涯学習文化財課総括課長、松本総務部法務学事課総括課長、
　岡部総務部法務学事課私学・情報公開課長、畠山文化スポーツ部文化スポーツ企画室企画課長、
　中里文化スポーツ部文化振興課総括課長、工藤文化スポーツ部スポーツ振興課総括課長、
　教育企画室　本多主任主査、浅沼主査

５　会議の概要
（知事挨拶）
知事：本日は、今年度第１回の総合教育会議ですが、昨年開催された希望郷いわて国体・いわて大会では、素晴らしい成績を収めるとともに、岩手県全体が大きな盛り上がりをみせました。東日本大震災津波や台風第10号災害における全国からの支援に対する感謝を示し、また、県政全体を推進するための大きな力になっていると受け止めております。

今年４月に、知事部局に新しく文化スポーツ部を設置しまして、国体・大会のレガシーをしっかりと残していきたいと思います。今後におきましても教育委員会としっかり連携しながら、文化・スポーツの振興に取り組んでいきたいと考えております。

一方、ラグビーワールドカップ2019（にせんじゅうきゅう）釜石の開催まであと900日を切っております。この釜石市でのラグビーワールドカップ2019（にせんじゅうきゅう）の開催も、東日本大震災津波の支援への感謝を伝え、復興の姿を国内外に発信する大事な機会でございまして、大会の成功に向け、委員の皆様にも、今後の機運の醸成等に一層の御理解、御協力をよろしくお願いします。

今日は、平成29年度の教育委員会の施策推進方針、そして、児童生徒一人ひとりに向き合い寄り添う学校教育の充実に向けた取組について、最初に教育長から説明してもらい、その後、委員の皆様と意見交換を行いたいと思います。

岩手の未来を担う子どもたちにとって、より良い教育環境を作っていくため、有意義な会議としたいと存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（協議事項）

(1)　平成 29 年度教育委員会施策推進方針及び児童生徒一人ひとりに向き合い寄り添う学校教育の充実について

高橋教育長：別添資料により説明

達増知事：それでは、本日のテーマについて委員の皆様から御意見や考えを述べていただきたいと思いますが、名簿順でいきたいと思いますので、八重樫委員からお願いします。

八重樫委員：私から口火を切らせていただきます。教育長の話を聞きながら、今更ながらの話ですが、学校あるいは、教育、教師に求められている期待は非常に多いと改めて感じています。やることがいっぱいありますが、大方の先生は頑張ってくれています。先ほどの知事の話でありました３．11 のとき、学校は子どもたちの命や地域の人々の命を守ったり、避難所運営をしました。あるいは国体で、私も北上での総合開会式、閉会式に行きましたが、子どもたちのものすごい声援、様々なパフォーマンスがありました。これらの指導を先生たちがやってくれています。やることが多いし、やってくれているなと感じています。その中でも学校が一番やらなければならないことは、学力を養う場所であることだと思います。教員は、学力をつける技術を持った人間でなければならないと思います。４月に県下各地の小学校の入学式の様子をテレビで見ましたが、どこの学校でも小学校１年生になったばかりなのに、勉強を頑張りたいとか、国語や算数を頑張りたいとか、あどけない純粋な言葉で口々に言っていました。友達を作りたいと答えた子もいましたが、国語や数学をできるようになりたいという願いに応えることが学校の役目だろうと思います。先ほど教育長の説明にありましたが、今年の教員募集パンフレットを改めて見ました。「こんな先生を持っています」の中の第一番に、「児童生徒に確かな学力をつけることのできる教師」とあります。愛情、使命感、責任感はもちろん大事ですが、冒頭、一番最初に、「確かな学力をつけること」とあるとおり、正に、先生方には自分の研究の成果や優れた指導力を持って子どもを磨き上げていただきたいと思います。併せて、知事のメッセージは今年からだということですが、学校教育の成否は教員の力に拠るところが大きいと、私が冒頭言ったことと一致しますが、教師の指導力や人間性が大事なのはそのとおりであり、そして、やりがいと魅力に満ち溢れた仕事だというのも同感です。私も教育に携わった人間の一人ですが、現職時代もそうですが、退職してからの方がむしろいろんなところで教え子に会って、タクシーの運転手だったり、飲み屋でも声を掛けられます。いろんなところで、先生に教えられて良かったとか、先生変わらないねとか、そう言われるからこそ長く勤められたと思います。私自身も小中高の先生の影響でこの道に入りましたが、一生やりがいがある仕事だったと思いますので、現職の先生方にも体当たりで立ち向かっていってほしいとの思いがあります。

小平委員：資料の中で一番感動したのは、教員募集のパンフレットです。というのは、昨今、マスコミから教員はブラック企業のような報道が出ることがあり、非常に憤慨というかがっかりしています。パンフレットを見た時に、知事が、教育は情熱、子どもたちに未来を与える仕事で素晴らしいものとのメッセージを贈っていますし、実際に教員になった先生７人の感想を読ませてもらいました。それぞれの目的、夢と希望を持って教員を目指したんだなとほっとした気持ちです。今、八重樫先生が学力と言いましたが、私は、今年度の教育委員会の方針の中で、特に、更に子どもたちに生きる力というか、将来自分が自立する力を身に付けるため、実践的、技術的な力を養うために、学力もさることながら、項目の中で２つ目に挙げているキャリア教育と復興教育の推進というところに注目したいと思っています。特に復興教育は、１道７県の教育委員の協議会の中でも、福島、宮城、岩手、青森が３．11 の被災に遭いましたが、その中で、甚大な震災を経た岩手県が、それを一つの教訓として、これから力強く立ち上がっていく子どもたちをどのように育てようかと取り組んでいるのが復興教育です。ややもすると総合的学習の中で防災教育のみになることが多いのが全国的な傾向かと思うのですが、本県では単なる防災教育に特化するのではなく、全教科の領域で復興教育を取り入れています。３つの教育的価値である「いきる」「かかわる」「そなえる」について、一つの例を挙げると、体育で基礎体力をつけるとはどういうことかをテーマにして教えている先生もいると聞いていますし、歴史を通して、大震災は考古の時代からあり、特に東北では 1200 年前には６年前の３．11 より大きかったと思われる津波があったことなどを題材として、歴史的に把握していく、認識していくというような教育をしている先生もいるようです。各教科でいろんな形で先生方が教えていると聞いて素晴らしいことであると思っています。これは生徒ばかりでなく、教員の資質の向上という観点からも、先生方も知ら

なかった教育の視野を広げ、また、親や地域にも広げるという点でも復興教育の役割は大きいと感じます。キャリア教育も資料のとおりと思いますが、本県のキャリア教育の具体的な取組の中で、地元大学への進学意識の醸成が書かれていますが、例えば、今の高校再編問題の中で、中山間地の小規模校が生き残りをかけて、地域の方々、あるいは先生方が取り組んでいる姿の一つとしてこういう例があります。ふるさとを知るということです。単にどこに行くという目先のことではなく、ふるさとのため、ひいては国のために自分がどういう役割を果たせるのか、あるいは使命感を持てるのかを考えるためには、ふるさとを知らなければ駄目だということで、復興教育にも関連しますが、ふるさとを知るという教育に取り組んでいる小中高があります。そこから、将来の自分の進むべき進路、どういうふうに生きたいか、僕はこういうふうに生きる、だったらどういう努力をしたら良いかというようなことを実際に取り組んでいる学校があります。私は、学力向上も当然のことながら、最終的には学力向上は生きる力だと思いますが、そういうものを育む復興教育やキャリア教育の取組について、岩手県の年度計画にみられる中身は、奥深い、幅広いと思います。学校だけでなく家庭の協力を得ながら、地域を巻き込んで理解してもらおうとする取組が見られます。私は、これに期待して少しでも手助けできればと思います。

芳沢委員：私もこの資料を見ましてキャリア教育について大変着目しているのと、それから、自分が今介護の仕事をしているところで、特に高校生と関連して感じていることを話したいと思います。資料によりますと、平成28年３月卒業者に占める高校卒の就職率が約３割、そのうち県内に就職する方が64%、実はここに書かれていませんが、１年以内に離職する新卒の生徒さんが３割程いるとの報告をいつも同じように伺っています。県内振興局や地元のハローワークから、高校でのキャリア教育の一環として、職業についての講演をしてくれないかとか頼まれて、職員が高校に行って職場についての説明や講演を行ったり、高校生のインターンシップの受け入れを行っています。私自身も、振興局主催で高校での就職希望の生徒さんの面接官をしてほしいとの依頼があり、２度ほど伺い何十人かの生徒さんと面接の練習をしました。ルールとしてどこを受けるかは聞いてはいけないが、どんな職種を希望しているかを前提に面接の練習を進めていきます。その時に、具体的に会社の内容を言えても、自分がどういう風な仕事をするかの具体的なイメージをほとんど描けていないことが多いですね。例えばテレビで見た会社のイメージだったりすることが多いんだなと、実際に生徒さんと問答をしながら痛感したところです。そのようなことばかりではないとは思いますが、その時は夏だったので、先生からも、年度の終わりにも何回も訓練するし、知識をこちらからも与えるので、もっともっとしっかりしてくると思うとのお話がありましたが、先生方も一人ひとりに合った寄り添う教育をするというのであれば、生徒の資質を良く見極めた指導も必要ですし、生徒自身もそれによって、将来の働いている自分をイメージできるよう、機会というか授業がもっともっと必要ではないかと思います。どこの企業でも人手がほしいと思って一生懸命努力していると思います。新卒者を取って育てることも覚悟して受け入れているつもりですが、１か月も経たないうちに、やりたいことが違う、自分の思っていたイメージと違うという言葉が出て、受け入れ側も努力をしているつもりですが、この前まで生徒さんだった方には分かってもらえないこともありますので、それぞれどの生徒さんにもなるべく希望がかなって、働いて楽しい場所を見つけるためにも、お互いの歩み寄りなどできる教育も必要だと思います。先生方も大変だと思いますが、特に就職担当の先生には、企業を知っていただく努力もしてもらいたいと思っています。先ほど東北・北部ブロック協議会の話が出ていましたが、今年６月に新潟で行われる協議会では、特別支援学校を卒業する障がい者の企業就労がテーマになっているようですし、岩手県では各機関との連携ができているとの話もありましたので、心強いとも受け止めていますが、今後の職業教育の充実に期待するところです。

藤井委員：今までの委員の方々と別の視点で勝手なことを申し上げたいと思います。年度が替わりましたが、やはり昨年度は何といっても希望郷いわて国体の成功、それのみならず、高校生の文芸、音楽の活動が全国でトップレベルの成果を上げられたというのは、よく言われる知育、徳育、体育が三位一体となったバランスのとれた若者の成長を昨年度見ることができて、県民の一員として心強く思っています。年度の最後を締めくくったのが、不来方高校の高校選抜野球出場でして、特に監督の人となりというか指導を見ていまして、これまでのクラブ活動と違っているなと大きな示唆を受けました。課外活動のみならず、一般の教科指導にも通じるものがあるのではないかと思います。部員がわずか10名ということが話題になったのですが、よく監督が言っていますが、20名入って10名やめて10名残っ

ているのではないんだと、10 名入ったのが１名もやめていないんだと、確かに２名やめるとチームにならないので、やめるにやめられないと思いますが、それが誇りで積極的に勧誘しているわけではないんだと、非常に野球の好きな子を育てると、一緒になってこれから 10 名でどう勝っていくかを考えたと言っています。９点取られても 10 点取れば良いという攻撃的な、打つことが楽しいのですので、そのあたりをパワーアップしていくことに戦術的に切り替えたという話を聞いています。指導に科学性があるということですね。監督自ら若い方ですが、頭ごなしに部員にこれしかないんだと押し付けるのではなく、新しいタイプのクラブ指導ではないかと思います。悪い言い方をすれば、特に体育会系の指導は３Ｋですね。危険とか汚いではなく、経験、勘、根性ですね。気合が入って４Ｋですね。本来入るべき科学的な取組がないんですね。科学が入れば５Ｋですけどね。それがないのがこれまでの問題だったのではないでしょうか。とにかくひたすら頑張れという精神論に陥りやすいですし、そこに保護者も含めた勝利至上主義となってくると、どうしても無理をしがちになります。一部の生徒はスターになるけれども、逆に多くの生徒はスポーツ嫌いになってしまいます。今申し上げたことは、英語教育とか数学教育なんかにも通じることだと思います。学力向上ということで、どうしてもトップクラスとか、平均点を上げることに目がいってしますが、なんとか嫌いとか、なんとかアレルギーのようなものを作らないで、みんな一緒になって全体で仕上げるような気風というものが育つ必要があるのではと思います。今後の課外活動のあり方で負担軽減という問題もありますが、今までの指導の在り方について非常に教えられることがあると思い、感想も含めて話しました。

畠山委員：私からもまた別な視点の話です。資料の３ページの冒頭等で、自立していく基礎をしっかりと、と書かれておりますが、これらに関連して主権者教育とか法教育の抱える問題やそれに対する取組に絞って意見させていただきたいと思います。法教育、主権者教育という言葉は、法務省であったり、文部科学省であったり、18 歳選挙権に関連して総務省だったりで、いろいろ検討されていて非常に分かりづらくもなってきています。県議会でも質問の多い事項だと伺っています。人権の共有主体である民主主義のこれからの担い手である児童生徒さんたちが自分たちで考えていろいろな物事を決めていくということは、とても大事なことだろうと思っています。全国的な問題と思っていますが、政治的な中立性の問題がよく言われています。昨年、政権与党が子どもたちを戦場に送るなという主張をして、中立性を逸脱した教育を行う先生たちがいるといって、政治的中立性について実態調査を行うといって大きな問題になったことがあり、記憶にも新しいかと思います。実際、政治的中立性の問題は、輪郭の不明確さがマジックワードのようなものになっているように感じています。現場の教員がこういった問題に取り組むときに困ったり、委縮したりすることがあるのではないかと危惧しています。しかも、これから公共という科目も出てきて、先生方も取り組んでいかなければならないときに、すごく困ることがないようになれば良いと考えています。民主主義の社会においては、あらゆる問題が政治的な問題とも言えることになってしまいますので、教育の視点からの再整理というのが必要なところかと思っています。そういう意味で、この岩手で、全国にも先駆けて、生の政治課題とか、高校生の政治活動とかに当たって、現場の先生方が余計な心配をすることがないような取組について、実際どこまでやっていいのか外郭をはっきりさせるような研究とか取組を、全国に先駆けてやっていくことは大事ではないかと思っています。特に岩手は、課題先進地域と言われています。それぐらいこれからの岩手を担う子どもどもたちは、いろんな問題を自分たちで考えて取り組んでいかなければならないと思っています。そういう意味で、主権者として、人権の共有主体として、これからを担う世代が自分の意思を持って、物事を決めていくことを学んでいく、人権意識の高まりは大事であると思いますし、ひいては、いじめ問題とか、学校で起きる体罰等の不祥事の問題にも良い効果をもたらすものではないかと思っています。以上、県のビジョンとして、高校生の自由な政治活動とか、政治的中立性という言葉を気にして現場の先生が困ることなく、意欲的に活動してけるような法教育、主権者教育の取組の重要性について普段意識することが多いものですから、その視点から意見させていただきました。

達増知事：ありがとうございました。

八重樫委員からは、学力の重要性と教員の重要性、また、そのやりがいと魅力について、経験に基づきながらお話いただいたと思います。

小平委員からは、復興教育とキャリア教育について、それぞれ現場で今行われることを例に出しながらお話しいただいて、この地域の生き残りをかけてという言葉がありましたが、私もいわゆる地方創生

の観点から、地域地域のふるさとに残る、あるいは、ふるさとに戻ることにつながるようなキャリア教育の思いがあるのだなと感じておりまして、ふるさとを知ることが大事とおっしゃったのですが、そのとおりだと思います。日本の教育は、明治維新の後の近代化の中で、全国どこに行っても言葉が通じる、計算ができるというような、富国強兵、殖産工業という方針の中で、兵隊になることができる、どこの工場でも働くことができるという時代の要請というか流れの中で進んできました。日本の誰とでも話ができるようになるとか、一緒に仕事ができるようになるというのは、非常に一人ひとりの生徒にとってもありがたいことだし、全体としても良いことだと思いますが、今の時代、地方としてのスタンスとか、地域地域の姿勢がしっかりしていないと、どうしても力や富のあるところに吸われていくような近代教育の過去の経緯みたいなものがあるので、その分、余計地方が頑張っていかなければならないのかと改めて思います。

芳沢委員からは、キャリア教育について、高校での面接の話もいただいて、会社の内容は言えても自分のしたい仕事を言えないということを、それが早期離職につながっているのではないのではないのかというのは、なるほどなと思いながら伺いました。欧米と比較すると、日本の就職は組織への就職で、欧米の場合、例えば管工事、プラマーですね、スーパーマリオの職業、パイプ工事、管工事が自分の得意な仕事、やりたい仕事で、どこの会社に入るかは二の次で管工事で食べていきたいというようなことで、労働組合も会社ごとではなく、管工事職人ごとのユニオンとかギルドで、経済や社会ができてきています。日本の場合は、学校の進学の延長上で就職もしています。企業、会社側もそういうイメージで、とにかく入ってもらって、どういう仕事をするかは後で決めるというようなスタイルです。余計に自分の仕事、やりたいこと、やることのイメージを持っての就職がやりにくくなっているのかもしれませんが、やはり、どこに入るかどこで働きたいかと同時に、何をするのかを主体性を持って自分の中から出てこないと、早期離職につながると思うので、そのところは日本に足りなかった部分だと思います。よほどしっかり気を付けて取り組んでいかないと主体性のあるキャリア教育につながっていかない恐れがあるので、気をつけていかなければならないなと思いました。

藤井委員からは、不来方高校の監督の方針、選手たちの練習の方針が、なるほど非常に科学的でユニークで、打撃に力を入れて練習するということ、その方が面白いしということですよね。学びは、すべからく科学的であるべきで、経験とか根性、気合ではなく、科学を身に付けることで学びがあるということがやはり大事だと思いますね。生徒がやりたいと思う意欲を引き出せるようなことを、思い切って前例にとらわれずにやっていくことが必要なんだと思いました。

畠山委員からは、主権者教育と法教育の話で、政治的中立の問題については、私は密かに個人的に考えているところがあって、アメリカのディベート教育にヒントを得ているのですが、アメリカの高校や大学ではディベートの対抗戦とかあるのですが、例えば、原発の是非、原子力発電所は良いか悪いかというテーマで、そこに集まった人がＡチーム、Ｂチームに、その場でくじを引いて賛成か、反対かのチームが決まるんですね。準備としては、原発賛成という理論建てと、原発反対という理論建ての両方を事前に準備しなければなりません。教育の現場では、そういう感じの政治にかかわる、特に選挙をめぐることとかは、自分がどういう理念、政策を支持するかとは別に、話題になっているテーマについて、賛成、反対をくじ引きででも自分の立ち位置を決められて、自分の考えと関係なく、賛成の意見をいろいろ調べてまとめて発表するとか、反対の意見をまとめて発表するとか、あるいは、意見を戦わせるようなことをすると、いろんなテーマに応じて、それぞれいろんな意見や考えがあるという多様性を理解し、また、多様性に対して寛容になっていくような教育ができるのではないか、大事ではないかと密かに個人的に思っています。一方で、主権者教育ということでは、主権者とはどうあるべきかというと、当然憲法にも書かれている価値があって、人権であるとか、主権であるとか、平和主義ですね。アメリカやフランスの憲法は、キリスト教的な神様との関係で、王様はもともと神からもらっているという王権神授説というのが、そうではなく、神はみなを平等に作っており神の前では平等だし人権もある、だから国民主権なんだというものです。キリスト教的な価値の共通価値観もあって共有しやすいのですが、日本の場合、宗教的背景なしに主権の意義とか、人権の価値を身に付けていかなければならなく大変なんだなと思います。日本の場合は、環境や自然を大切にするということであれは共有しやすいのではないでしょうか。まず自然は大事だから、命も大事、命が大事だから平和主義があり、その命を持つ一人ひとりを大事にしていかなければならないから人権というように、自然が命を生み、命から主体的な意思があって、だから自由も大事なんだというような流れで、主権者の在り方を共有していくことだった

らできるのではないかと思っています。一方で、価値の問題を棚に上げたテクニカルな政治的中立の教育の仕方もあると思いますが、もう一方では共有できるような価値についてきちんと積み上げていくような主権者教育というのも模索していかなければならないと思います。私もいろいろと話させていただきましたが、他に御意見はありませんか。

八重樫委員：一つだけ話させてください。今、知事が話されたことと外れるかもしれませんが、我々大人は、子どもを裏切らないような、信頼されるような大人になるべきだということを、是非教育員会全体として、県民運動といかないまでも県全体としてやるべきと思います。千葉県で見守り隊の大人、保護者会の会長をやっている人が子どもを殺めた事件がありました。決着はまだついていないようですが、昔は知らない人に付いていかないようにということでしたが、今では知っている人にも付いていくなと言わなければならないような世の中では駄目だなと思います。また、福島から原発の問題で他県に避難した子がいじめにあったということがありました。岩手県では調査した結果、ないということでしたが、他では、賠償金があるだろうということも言われたようです。それは、子どものセリフとしてはありえないだろうと思います。大人が家庭の中で言ったことを言ったのだと思います。つまりは、大人の在り方が問われているのではないかと思います。子どもたちに良い影響を与えるような教師によって岩手の教育を充実させていってほしいと思います。

達増知事：ありがとうございます。他に御意見はありますでしょうか。では、申し訳ありませんが、時間も迫っていますので、また何かあれば、総合教育会議以外の場でも意見交換する機会があると思いますし、個別にでも良いと思います。今年度も色々意見交換しながらやっていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

達増知事：「４　その他」ですが、事務局で何か用意しているものはありますか。

高橋教育長：こちらからございません。ありがとうございます。

達増知事：委員の皆様からありますでしょうか。

八重樫委員：知事は過密な日程だと思いますが、テーマを決めずに本日のようなフリートーキングをしていきたいですので、よろしくお願いします。

達増知事：ありがとうございました。それでは、進行を事務局にお返しします。

高橋教育長：本日は様々な御意見をありがとうございました。教育委員会議でも御意見をいただいておりますが、知事と委員との話し合いということで、普段お聞きしたことのない御意見も頂戴しました。これからの教育行政の実践に当たりまして、本日での会議での御意見も踏まえさせていただきながら、進めていきたいと思います。

高橋教育長：それでは以上で、本年度第１回目の総合教育会議を終了させていただきます。ありがとうございました。